AACK 京都大学学士山岳会 No.70

Newsletter

August 2014

http://www.aack.or.jp

目　次

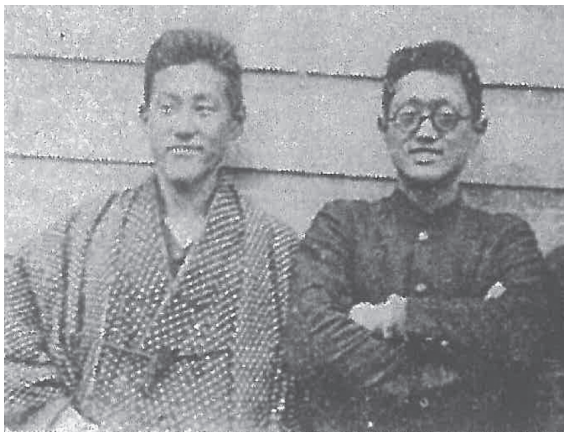
人物抄　佐島敬愛
「ロマンを追って八十年―佐島敬愛の人生」の書評にかえて
平井一正 ……1
今、西堀榮三郎流が熱い？！
角川咲江 ……4
トレイルラン～山を走る楽しみ～
坂田洋子 ……6
書評
斎藤清明著
『今西錦司伝　「すみわけ」から自然学へ』
榊原雅晴 ……8
図書紹介
「南極観測隊のしごと」
観測隊員の選考から暮らしまで
国立極地研究所南極観測センター編
横山宏太郎……10
第 29 回雲南懇話会（2014 年 6 月 28 日開催）に於ける講演概要等
前田栄三、安仁屋政武……11
会員動向 ……12
編集後記 ……13

人物抄　佐島敬愛

「ロマンを追って八十年―佐島敬愛の人生」の書評にかえて

平井一正

この本は、AACK の大先輩佐島敬愛（サジマヨシナリ、1904 年 2 月 23 日～ 1990 年 7 月 20 日）について、三高の後輩の河野勲がライターとして執筆した私家本である。筆者は前から佐島敬愛のことを知りたいと思っていたが、たまたまこの本の存在と、それが岐阜大図書館にあることを知り、事務局に頼んで取り寄せてもらって一読した（文献 1）。



三高時代の佐島敬愛（右）と今西錦司（左）

梅棹忠夫をして、「佐島さんという人はほんまに不思議な人やった」（文献 2）と言わしめたほどスケールの大きい行動力のある人で、その一生は、戦争をはさんでまさに波乱万丈であった。佐野真一はその著書で、「謎めいた男、アジア版、アラビアのローレンス」と称した（文献 3）。

佐島は今西錦司と三高で同クラスで、今西にあてた本書の献辞に、『「夢」と「現実」の境に「小さな扉」がある。その扉を「押し開く」と限りない「ロマンの世界」が展開する』。と書いてある。

以下本書にしたがい、彼の人物を紹介する。

佐島の父敬助は、大阪高等工業学校から大阪 YMCA の総主事になり、この分野で活躍した。恵まれた家庭環境であり、敬愛は四男四女の長男であった。天王寺師範付属小学校から天王寺

中学校にすすみ、大正10年（1921年）3月三高理甲に入学した。中学のときからそうであったように陸上部に入り、対一高戦に汗を流した。クラスの中に今西錦司がいた。今西も陸上部に入っていた。成績はよく、今西らに勉強を教えた。金子校長排斥事件のストライキのため、今西と共に一年おくれの進級で、そこで西堀栄三郎や渡辺漸と知り合う。

佐島は陸上競技（中長距離）に熱中すると共に、登山にも熱中した。大正12年（1923年）4月には今西、西堀、渡辺漸、四手井、高橋、桑原、上林明らと共に、それまでの三高山岳会にかわり、三高山岳部を正式に発足する。今西がボス、佐島が試験勉強の指導役であった。

因みに、三高山岳部報告第1号は、奈良県台高山系・北股川水源略図であるが、これは大正12年（1923年）に今西、西堀、佐島らが踏査した記録である。（佐島の山行に関しては、文献4に少しふれてある。ただ三高卒業以後はほとんど登山をしていない。）

当時ほとんどの三高卒業生が、卒業後は東京か京都の帝国大学に進学するのが普通であったが、佐島は違った。大正14年（1925年）3月、理甲三クラス97名中7番の成績で卒業すると、アメリカ留学に決める。そしてウィスコンシン州立大学に入学する。それは父啓助の当地のYMCA主事との縁故によるものであるが、もっと広く未知な世界を知りたいというロマンに惹かれた結果であろう。

恵まれた友人、知人のおかげで、留学生活は順調にすすむ。東畑精一など多くの留学生仲間やアルバイトを通して多くのアメリカの友人をつくる。またウイスコンシン大学経済学科関係の成績優秀者のみで構成されるソサイエティのメンバーにえらばれるなど、成績も優秀であった。昭和2年（1927年）7月、2年間の留学生生活を終えて帰国した。

そして同年9月、三井物産入社。今西、西堀はまだ大学在籍中であった。会計、秘書、営業などの仕事をしてきたが、彼のロマンを生かせないということで昭和5年（1930年）10月同社を退職した。当時は就職難の時代であり、退職することはかなりの冒険であったに違いない。昭和製糸の嘱託として2年間勤務したあと、当時関東軍参謀総長小磯国昭の紹介で、奉天の満州航空に入社する。人材との出会いと運のよさが彼にはついている。昭和8年（1933年）、入社して3ヶ月で営業課長となる。満航の空路開拓、路線開拓などの仕事をした。

昭和9年（1934年）11月ヤス子と結婚、満州での新婚生活を送る。北京駐在、さらに天津駐在と忙しい日々であった。この間、伊藤愿にも会う。昭和10年（1935年）、軍の内蒙古視察調査隊に参加。満航の事業エリアの拡大を構想する。一方父啓助の老齢にともない、帰国してほしいとの要請をうけ、9月に辞職し、東京に帰り、義兄の新事業を手伝う。

昭和12年（1937年）、満航がドイツとの定期航空協定締結にむけて国際航空事業を企画し、半官半民の会社（大日本航空会社）の設立に動く。佐島は企画部国際課長として再びその仕事に携わる。アフガニスタン領空通過交渉の一環として、彼はアフガニスタンから7名の留学生を日本によび、面倒をみた。その生活指導の面で、彼らを赤倉のスキー合宿に参加させる。このときアシスタントとして加藤泰安が同行し、その縁で加藤は満鉄特航部に入社する。

昭和14年（1939年）父啓助死去。当時、アフガニスタン入りの工作のためにタイに滞在していた佐島は、急遽帰国した。

同年4月、陸軍省の岩畔豪雄（元陸軍少将、中野学校創設者）からのたっての要望で、大日本航空会社をやめて、新設の昭和通商（株）という会社へ入社する。この会社は三井物産、三菱商事、大倉商事の三財閥が出資して設立されたもので、日本軍の中古武器輸出、軍事物資輸入などを行う一種の工作機関である。ただその実態は諜報活動とアヘン取引を行う秘密特務組織であったといわれている。

入社した同年9月、昭和通商の調査部活動の一環として、佐島は7ヶ月間、単身東南アジア、バルカン諸国、中近東に出張する。兵器売り込みの仕事であったが、軍の密命を帯びた出張であった。帰途ベルリンで3ヶ月滞在する。ちょうど日独伊三国同盟調印（1940年9月）の直前である。ここで佐島は旧知の古内広雄書記官に再会する。古内は佐島のシベリア鉄道の乗車許可申請や帰国手続きなどよく世話をした。（この古内は後のパキスタン大使で、1961年の高村によるサルトロカンリ許可取得交渉のときや1962年のサルトロカンリ遠征隊がカラチ滞在中お世話になった。またこの縁で、彼がイン

ドネシア大使となったときに、加藤泰安隊長の京都大学西イリアン学術探検隊の実現に尽力した。AACK とは縁の深い人である。)

昭和 15 年（1940 年）10 月、佐島は長いベルリン滞在を終えて帰国の途につく。このとき偶然にも、後に日本民族学協会設立で共に努力する岡正男と同行することになる。帰国した佐島は、多忙な中を協会設立に動き、当時日銀副総裁であった渋沢敬三から全面的協力をとりつけ、そして昭和 16 年（1941 年）には財団法人日本民族学協会が設立された（会長渋沢敬三、理事長岡正男、常務理事に佐島敬愛）（因みに渋沢敬三の祖父の栄一は理研の創設者である）。

この民族学協会は、戦争をはさんで長らく休眠状態であったが、後に 1963 年渋沢の委託をうけて佐島らが体制を立て直し、民族学振興会と改称した。これが後に 1976 年に設立された国立民族学博物館につながる。

昭和 16 年（1941 年）12 月、日本は太平洋戦争に突入する。佐島は 37 歳であった。昭和通商は軍事物資調達機関となって、南方地域に会社の拠点作りをすることになり、彼はその責任者として、仕事は多忙をきわめた。

戦争もたけなわの昭和 18 年（1943 年）の秋、今西錦司の依頼で、大学を卒業した川喜田二郎、藤田和夫、伴豊（いずれも 1942 年の今西錦司隊長の北部大興安嶺探検隊隊員）の 3 人が、こともあろうにこの昭和通商に入社し、調査部に勤めることになった。どういう動機で 3 人がこの会社をえらんだかは不明であるが、この会社が全世界に支店をもち、特にアジアの辺境の事情を調査するということに惹かれたのか、徴兵免れか定かでない。梅棹は大学院特別研究生として徴兵は免れていた。そして一時東京の彼らの下宿を訪問している（文献 2)。しかしこの 3 名とも入社してまもなく召集され、伴は後に戦死する。また昭和 19 年（1944 年）2 月に「西北研究所」が張家口に設置されたが、所長の今西錦司以下所員はすべて昭和通商の嘱託の名目で赴任するという経緯があった。

このような佐島を介しての AACK の諸先輩と昭和通商とのつながりは、この商社の国策的な性格から、表には出したくない、あまり語りたがらない雰囲気があるようである（梅棹忠夫全集でも佐島については、全くといってもいいほど記述がない)。

昭和 20 年 8 月終戦とともに、陸軍の後ろ盾で設立された昭和通商は会社解散にいたる。

幸い佐島家は家や家財が戦火による被災を免れてそっくり残った。また 3 男 2 女の子沢山に恵まれていた。終戦の年の秋、佐島は佐島事務所を開設する。41 歳。かれには①人脈、②英語力、③情報収集能力と自己再生産能力があり、これらをテコに佐島事務所は動く。翻訳業のほか、日米相互の情報交換と斡旋、サービスなど。得意の語学をいかして進駐軍からの情報も多く、内外多くの人が出入りした。加藤泰安もそのひとりであった。そして鉄道弘済会顧問や信濃毎日新聞の嘱託などを勤め、後に昭和 30 年頃、信越化学工業の取締役になる。

知的人脈も広がり、小坂順造と協力して、昭和 30 年代からの日本経済の高度成長を導く素因に数えられる原子力平和利用と生産性運動に先駆的努力をした。

1950 年、25 年ぶりに渡米（客船で)、戦後の新しいアメリカを見、新しい情報を日本にもたらした。以後、日米産業調査会副会長、昭和 30 年（1955 年）の国際商業会議所（ICC）の東京開催事務総長など財界、政界などに通じている彼ならではの活躍が続く。

佐島敬愛は、以上の紹介で分かるように、戦前は軍と接触して国策を動かす仕事をし、戦後は将来を見通す大局観と、知的人脈、優れた語学とセンスなどを使って、歴史の裏舞台で日本経済の発展に心血を注いた。登山や探検の分野での輝かしい活躍はないが、国をうごかすような舞台で、ロマンあふれる活躍をした隠れた人材であったことは間違いない。

文献

1) ロマンを追って八十年―佐島敬愛の人生―（私家本）昭和 58 年（1983 年）（508 頁）
2) 藍野裕之：梅棹忠夫、山と渓谷社、2011 年
3) 佐野真一：畸人巡礼怪人礼讃―新忘れられた日本人Ⅱ、毎日新聞社、2010 年
4) 今西錦司全集、別巻、年譜、講談社、1994 年

今、西堀榮三郎流が熱い？！

西堀榮三郎記念探検の殿堂　副主幹　角川咲江

平成26年、西堀榮三郎記念探検の殿堂（以下、「西堀館」）が、にわかに注目を集めています。

西堀館が、今年の8月には開館して20年たつということも、西堀榮三郎さんが生誕111年、没後25年ということも、あえて言わなければ行政の人間ですら知らないくらいなのですが、「Nitro（ニトロ） Eventual（イヴェンチュアル）がブラジルで開催されるロボカップ世界大会に出場！」と各種メディアが取り上げたとたん、ちょっとビックリするようなご依頼を含めて多くの反響をいただいています。

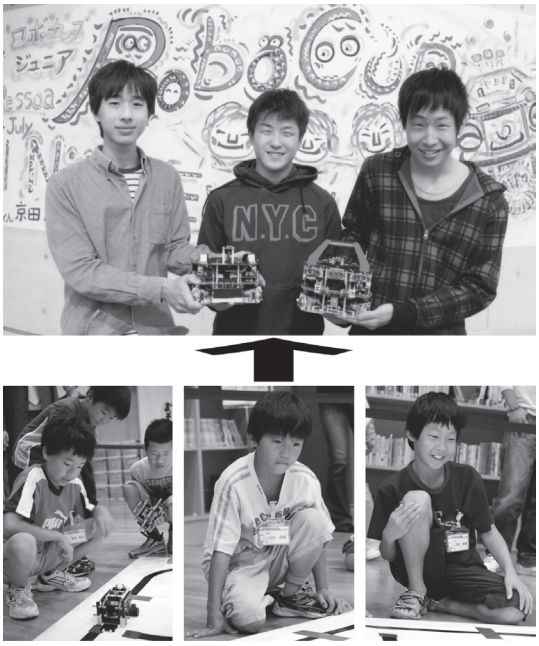


写真１　Nitro Eventual の３人　小５→現在（高３）

■西堀流の人材育成

Nitro（ニトロ） Eventual（イヴェンチュアル）とは、探検の殿堂が平成18年度に立ち上げた自律型ロボットの活動「科学探検隊ココロボ」（初級講座）の卒業生で、今年でロボット歴9年目を迎えた高校三年生の3人組チームです。彼らが初級講座を卒業した時、西堀館には“もっとロボットを続けたい”要望に応えられる事業予算がなかったので、保護者が立ち上げた研究サークル「ココロボ2」で活動を続けてきました。自主性が一番大事とした西堀イズムに賛同した保護者たちが中心に運営しているので、講師はいませんが、環境整備と情報支援に関しては、驚くほど充実しています。

日本代表として世界に行く高校生チームの存在を知った方が、「うちの息子も世界に行かせたい」とか「イベントに来て欲しい」というリクエストをしてくださるのですが、勝たせる塾でもイベント屋さんでもありませんので即座にはお応えできません。しかし、「何でロボットなの？」とか「いつから南極じゃなくて、ロボットになったの？」と質問していただいた時がチャンスとばかりに、「西堀榮三郎さんはですね～、82歳の時、C言語でプログラミングを始めまして･･･」と一席弁ずる勢いで説明させていただきます。すると、“西堀流”で活動してきた成果であるという点に引っかかり、「ナニナニ？西堀流の人材育成？」と西堀さんに関心を向けていただけるようになるので、だいぶ楽しくなってきました。世の親御さんや祖父母、そして青少年育成のように、教育に関心の高い方々にとっては、まさにNitroの成果は『秘訣は何？』と聞きたくてウズウズする内容だったわけです。私にとっては盲点でした。

人は成功例に学びたがります。そして、特に親などは、我が子もと大いなる夢と期待を抱きます。子ども自身が望んでいようといまいとおかまいなしには困りますが、今がチャンス！Nitroの3人には、「悪いけど、あなたたちを

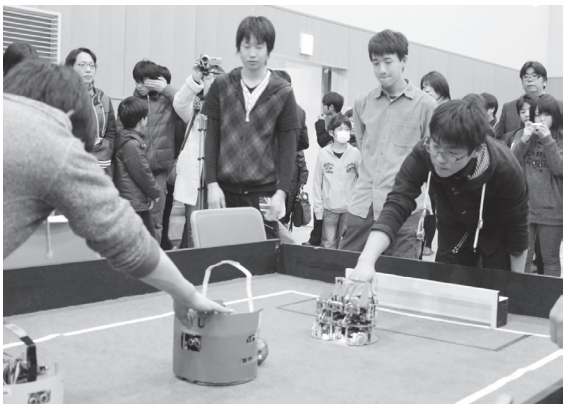


写真２　ロボカップジュニア京滋奈ブロック大会で優勝

エサにして西堀さんの布教にガンガン利用させていただきます」と、Nitroの自慢話から始めて西堀さんへと繋げています。

■西堀流、やる気にさせるポイントは？

速攻で成果をもたらしたい、そして、普段から無意識に子どもに命令している親御さんには意気消沈させてしまうような内容なのですが、ざっとまとめると、下記の3点になります。

1. 仮に自分が本心から良いとは思っていなかったとしても、「そりゃ、ええなぁ」の一声をかけ、No（否定語）やif（これも否定語の一種）を使わないことである。
2. 自信をつけさせ、失敗を責めない（＝失敗に学ばせる）ことである。「応用の才」は、教えようとして教えられるものではない。やらせてみる以外にはない。大いに失敗させてみることなのだ。
3. 忍耐である。待つことである。鳴くまで待とうホトトギスである（自主性が一番大事）。

更に、大きなハードルを設定しないで、その人の能力に合わせた目標にすることや、その時が来たら、機を逃さずに褒めるというのも西堀ポイントですが、驚くことに、西堀さんは、

「60点以下の落第点をとってくる子でも、65点をとる時がある。まぐれがある。たまたまできるときがある。その時すかさず“できるじゃない”と一言いえばいい。本人も“そうだ”と思う。そこが重要」

と言っており、褒めるポイントが決して80点とか90点ではないことでした。

Nitroに戻ると、彼らは3人とも普通の高校生です。部活に精を出して国体を目指す子あり、今時の若者らしく音楽やダンスが好きで学園祭では副団長をつとめる子あり、ちょっと悩めるお年頃でありと、それぞれがロボット以外でも青春を謳歌しています。学校の成績が飛びぬけて良いわけでもない彼らが他の子と少し違う点があるとすれば、自律型ロボットが生活の一部である点と、良い意味で素晴らしく諦めが悪い点です。だから、負けて悔しい思いをしたとしても、やめようとは思っていません。

そんな彼らの保護者たちを見ていると、この方々こそ、西堀イズムの実践者なのだと思います。楽観的なものの見方をし、成果を期待していないわけではありませんが、焦りません。かつての内部競技会でのエピソードになりますが、昨日まで高得点を稼いでいた子が、当日の大会ではガタガタ。どうしちゃったんだろう、あんなに上手くいっていたのに？と心配した私に、彼のお母さんは次のように言いました。

「あれは上手く出来だから、新しいのに挑戦するんだって言ってました。きっと、思うようにできなかったんでしょうねぇ・・・ふふふっ」

こんな肝のすわった親の子です。1点入れるごとに“キャー”と叫んで喜んだり落胆している保護者が多い中で、涼しい顔をしている母親を見ながら、将来が楽しみな子だと思いましたが、正にその通りになりました。

写真３　ブラジルで開催された世界大会2014
（大会３日目、中国との試合に負けて残念！）
チーム単独では、残念ながら上位入賞は果たせず。
しかし、５カ国で結成したSuper Team（Open League）では２位となった。

■魅力的なパートナーとの協働

西堀さんは、「教育」を考えた時、知識を授けるだけの「教」より「育（＝自分の能力を高めるための体験）」が大事であると言っています。子どもたちに「育」をするためには、西堀流でいう「チャンスを与える」ことのできる大人であらねばならないわけですが、不思議と西堀館には、それができる大人が集まってきます。

自律型ロボットの保護者たちはもちろんのことながら、無線倶楽部や最近ではアーティスト集団と、それぞれの専門知識や技術、ノウハウと、時に体力を提供してくださるので、私たち職員ですら魅力を感じないではいられない味わい深い活動が可能となっています。博物館評価でお世話になっている北海道大学の佐々木亨教授は、非常に成熟したパートナーであると評価してくださいましたが、それぞれのパートナー

は、言ってみれば、「その夢（目標）、買うた！」で来てくださっている方々なので、自主的である（頼まれ仕事ではない）ところが西堀流に合致しているわけです。

西堀家は近江商人でした。西堀さんの中には、近江商人が到達した商いの精神である「売り手によし、買い手によし、世間によし、三方よし＊」の考え方があるように感じており、同じ課の博物館がグループとして共通の使命を新しく設定する際には、市民パートナーとの協働は「三方よし」の考えで進めていくことにしました。

20年かかってようやくひとつの芽が花開いたところですが、西堀流の方々と一緒に、これからも楽しみながら続けていけることを願っています。

＊表現自体は歴史的用語ではなく、近年、近江商人研究者によって用いられている造語である。しかし、東近江市ゆかりの歴史資料から、少なくとも江戸時代中期には表現こそ違え、後の三方よしの精神に到達する考えが近江商人の里にあったことがわかっている。

トレイルラン～山を走る楽しみ～

武庫川女子大学山岳スキー部OG　武庫川女子大学勤務　坂田洋子

■はじめに

武庫女の山岳スキー部時代の引率が横山先生、また、大学4年時100日以上いたほど妙高好きで京大ヒュッテにも兵隊としていさせてもらったこともあり米軍シュラフに身をくるみ朝まで語り明かした日々も数しれず。そんなご縁で原稿を書かせていただくことになりました。

■トレイルランって？（以下「トレラン」）

トレランは、登山道、林道、古道など未舗装路を走る欧米で始まったスポーツです。ここ10年ほどで徐々に人気が高まり専門ショップやレースも多く開催されています。

■初めてのトレラン

高校卒業記念に武庫川を海まで走ろうと思いつきました。当時、植村直巳の『青春を山に賭けて』『北極点グリーンランド単独行』などに感銘を受けていたと思います。

写真1　京大ヒュッテの筆者

彼は、どんな小さな登山でも自分で計画し、準備し、自分の足で登山する。これこそ本当に満足のいく登山だと記す。当日は、三田から川沿いに走ったり歩いたりしながら鳴尾浜を経て神戸の自宅まで、2月の川に落ち溺れそうになったりしながらも完走し、自分なりに大満足でした。

直巳は、人の目につくような登山よりこのエーデルワイスのように誰にも気づかれず自然の冒険を自分のものとして登山をする、これこそ単独で登っている自分の憧れていたものではないかと語っている。

まさに武庫川ランは、まさに私の中でエーデルワイスのような冒険となりました。

■トレランは山のひとつの楽しみ方

花や景色の写真を撮ったり、難しい岩稜を目指したりいろんな山の楽しみ方があると思いますが、私の楽しみは山を走ることです。景色のよい山道を走るのは気持ちがいい。そのうち、「あやつり人形走法」、「おおかみ走法」（四足走）、「脱力系走法」、「ジェットコースター走法」など自分なりの走法を編み出し（知りたい方は今度ぜひ一緒に走りましょう！）トレランにのめり込んでいきました。

写真２　北丹沢山岳レースのゴール

■トレランレース

3 年前、熊野古道 7 キロのレースに初参加。女子総合 2 位でした。雨でドロドロになった道や崖を走るのをマラソンからトレランに入ったランナーは苦手とするところですがそういうコースこそ私の得意とするところ。

どこまで自分は行けるのだろう？とより長い距離、難易度の高いレースに挑戦しました。

161 キロの UTMF（ウルトラトレイルマウント富士）を 43 時間で駆け抜け、71.5 キロのハセツネを 16 時間、関西最大の草レース六甲キャノンボールでは六甲全山縦走の往復コースを 20 時間以上かけて完走しました。大好きな妙高にも信越五岳 110 キロのレースがありいつか参加したいと思っています。

■トレラン単独行

単独行は、計画を誰かと調整する必要もなく、自分のペースで行けて自分の責任で進退を決められるからいい。留まりたい場所で留まり、とばしたい所はとばす。山の景色や空気の一部に自分がなっているようなそんな一体感が嬉しい。そんな時、誰かといる必要も感じないし、孤独を感じることはありません。

京都一周トレイル（70 キロ）では、伏見稲荷から夕闇せまる中走りだし夜中にライトもつけずに歩く老人とすれ違った時はさすがに怖かったですが残雪の比叡山を経て嵐山迄完走。熊野古道小辺路（70 キロ）では、高野山から走りだし三浦峠で暗くなりシイタケハウスに泊めていただいたりしながら果無山脈の美しさを堪能。大雲小雲取越では、深夜猪の声にびびったりしながら新宮から川湯にドボンと浸かるまで約 70 キロを走りました。長いトレイルだけでなく、近所の段が峰や小野アルプス、高御位山など気に入ったところは何度も走りました。

高島トレイル塩の道トレイル、海外では、モンブランなどこれから走りたいところは、まだまだいっぱいです！

■最後に

ブログ「なんでもない日バンザイ！」

レースや登山のカテゴリでトレランのことを書いています。よかったら見てみてください！

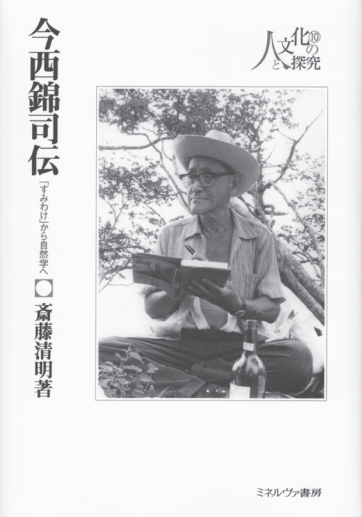
写真３　マウントレイニアを走る

書評

斎藤清明著『今西錦司伝　「すみわけ」から自然学へ』

ミネルヴァ書房、2014 年 6 月、ISBN978-4-623-07090-9

榊原雅晴



会員の斎藤清明さんがミネルヴァ書房から『今西錦司伝　「すみわけ」から自然学へ』（396 ページ、4860 円）を上梓した。松籟社『今西錦司――自然を求めて』（1989 年）、講談社『増補版　今西錦司全集』別巻（1994 年）、ナカニシヤ出版『初登山――今西錦司初期山岳著作集』（1994 年）、国際花と緑の博覧会記念協会『フォト・ドキュメント　今西錦司』（2002 年）など多くの今西本の執筆・編集に携わってきた著者の集大成といえるだろう。

■「自然学」を追っかけ

この種の評伝は時代順の記述が普通だろうが、序章に「自然学の提唱」を持ってきたところに本書の狙いを感じる。昆虫学、生態学、生物社会学、人類学、進化論を経て晩年の今西がたどりついたのが「まるごとの自然を相手にせよ」という「自然学」だが、常識的な科学観に立てば扱いがやっかいなのである。

たとえば 1983 年、親しい学者を集めた「洛北セミナー」。今西は進化を歴史と見る立場を鮮明にし、「（この立場は）もはや自然科学と訣別するべき立場なのである」と宣言。歴史であれば一原因が一結果を生むという要因論は場違いとなる。そして有名な「進化は変わるべくして変わってゆく」という禅問答めいたフレーズを口に出し、「自然科学者を廃業したものの言葉として、味わってもらいたい」と述べるのである。

最前列で聞いていた著者は「今西さん、べつに自然科学者やめんでも、ええんや」（川喜田二郎）、「進化というものに、今西さんは価値を認めてるのですか」（飯沼二郎）、「まだ今西流だけの考えにまで、悟りきれんのです」（森下正明）など、盟友たちの戸惑いに満ちた反応を拾い上げている。

だが著者はこのやっかいな対象に魅せられてしまう。＜今西の進化論は、自然学という自然観に昇華していったのだとおもう＞＜わたくしは、「すみわけ」から展開してきた、今西の「自然学」を“追っかけ”ている。この自然学はきわめて魅力的で、共感するところが大きい＞と。

本書は「すみわけ」から始まり、「自然学」へとたどり着く思想の旅を追体験するものなのである。

■「すみわけ」の発見

そのスタート地点となる「すみわけ」の言葉について著者は興味深い考えを提示している。「すみわけ」（棲み分け、住み分けなども含む）という言葉を今西が最初に使ったのは『生物の世界』（1941 年）においてであるが、著者はすべての用例を同書からピックアップ。初めは「住み分ける」「棲み分ける」など動詞として用いられたが、それ以降は名詞（一部動名詞的に使われた例外を除く）として使われていることに注目。「すみわけ」という生物現象の発見から、「棲み分け」という用語を唱えるにいたるまでの過程を解き明かそうと試みる。

そのために今西の没後、自宅から見つかった『採集日記　加茂川　1935』を詳細に解読する。1935 年 3 月～7 月にかけ加茂川で集中的に行ったカゲロウ類の調査結果がびっしりと書かれた 4 冊のノートをワープロでおこしながら、あることに気づく。そこには「すみわけ」の現象に

ついては詳細に描かれているのに「すみわけ」の言葉はでてこないのである。

著者はこう推理する。「すみわけ」という事実を前にし、これを理論でどう説明すべきかと、今西は思索を深めていたに違いない。そして今西進化論の核となるべき「種社会」の概念に到達したのだと。

＜こうして、今西は「すみわけ」を通して「種社会」をみつけた。そのときに、「すみわけ」はことばになったのではないだろうか。それを、自らの最初の学術書である『生物の世界』において用いたのである。まず、動詞として、そして名詞として＞

言葉を手がかりとして今西の思想形成を追っていくところは、さすが練達の新聞記者である。これなどは立派な「特ダネ」であろう。

■今西番記者として

ところで本書の帯には「今西番記者が見た自然学のパイオニア」の文章が踊っている。少年のころから今西に憧れ、上洛し、その出身大学・学科に入学。もちろん山岳部に入部した。新聞社に就職した後も、京都支局員や専門編集委員として今西家に親しく出入りした。今西の孫、拓人氏（武奈太郎氏の長男）は現在、毎日新聞大阪本社社会部のデスクを務めているが、「子供のころ、うちにしょっちゅう斎藤さんが出入りしているので、親戚のおじさんかと思っていた」と話していたほどだ。番記者といえばこれほど強力な番記者はいないだろう。

それだけに随所にちりばめられた番記者ならでは見聞が面白い。たとえば以下のようなものである。

・ノーベル経済学賞の受賞者ハイエクが 1978 年と 1981 年に来日し、京都で今西と対談した。「日本の独創的な思想家」として先方が対談を望んだという。だが、今西の進化論を理解しようとしたハイエクも、ダーウィンの評価という点では譲らない。議論は「文明の将来」にまで及んだが、全般的には大きなすれ違いに終わった。傍聴していた著者は「両者は歩み寄ったかとおもうと、離れていき、横綱相撲を土俵下で見ているような気がした」と印象を振り返る。

・中曽根康弘首相が 1984 年秋に入洛し、南禅寺そばの野村別邸で今西、桑原武夫、梅棹忠夫、上山春平、梅原猛の学者 5 人と懇談した。今西を除く 4 人にはある魂胆があった。国立の日本文化研究所を京都に創設するべく、直談判する手はずになっていた。今西だけはそんな生臭い話とは別に中曽根と語り、機嫌良く酒と料理を楽しんだ。

この懇談について著者は事前に聞かされていた。「中曽根には前から、いっぺん、食事にでも、いわれたんやけど、わざわざ東京まででていくこともあらへん。京都に来るというので、呼ばれにいくんや」「野村別邸というから、どこから料理をとるんか、尋ねてやったんや」と、味にうるさい今西ならではの言いぐさだった。

このような番記者ぶりは 1988 年 2 月、今西が入院しても続く。

■ 50 年後の卒業論文

入院 3 カ月後に刊行された今西編『ヒマラヤへの道』を病室に届けた際には「ほう、立派なもんやな」と本の重さを確かめていた。1989 年末に「今西錦司―自然を求めて」（松籟社）を自宅に届けて、その足で病院に向かい「斎藤オチョコです！」と大きな声であいさつすると、かすかに分かってもらえたようだった。その後ほとんど眠った状態が続いたが、時折、「さあ、行こか」とつぶやくことがあったそうだ。どんな夢を見ていたのか。そして 1992 年 6 月、ついに今西は帰らぬ人となったのである。棺は弟子たちに担がれ、「すみわけ」発見の舞台となった鴨川堤を運ばれた。著者も棺を担ぎ愛唱歌だった旧制 三高の「紀念祭歌」を歌ったが、「思いがこみ上げてきて、涙声になった」。

今西亡き後も著者は樺太やポナペ島、ヒマラヤ、アフリカで彼の足跡をたどり続けた。その過程で「私なりの今西錦司伝をまとめよう」と気持ちを固めたという。1964 年春、京大の合格発表の日に山岳部の部室を訪れてから半世紀。「本書を著すことができて、やっと卒業かな」という感慨で本書を結んでいる。

◇　◇　◇

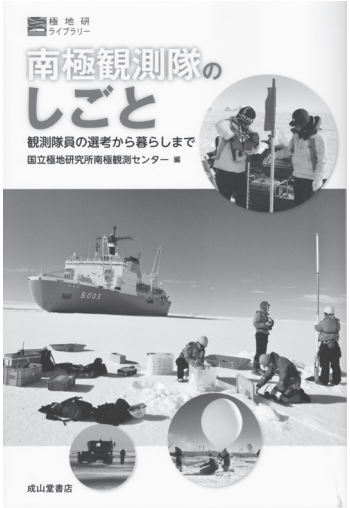
わが尊敬する斎藤オチョコさんの大著を紹介し、最後に気がついた。登山や探検についての血湧き肉躍るくだりに触れるのをすっかり忘れていた。だが、探検・登山についても AACK 会員なら一気呵成に読めること請け合い。ご安心あれ。

図書紹介

「南極観測隊のしごと」　観測隊員の選考から暮らしまで

国立極地研究所南極観測センター編
成山堂書店、2014 年 3 月　極地研ライブラリー
243 ページ、2400 円（税別）　ISBN978-4-425-57071-3

横山宏太郎



この本を初めて手にしたとき、子供向けの本かと思った。「南極観測隊のしごと」と、「しごと」を平仮名で書いてあり、表紙には目を引くカラーの写真が使われていたためである。中味を見ると、それは間違い、大人向けの本であった。これと同じような内容の子供向けの本があってもよいと私は思うのだが、それはこののちに期待するとして、本書の内容は以下のとおりである。

第 1 章　日本の南極観測
第 2 章　南極観測はどのように進められるのか
第 3 章　観測隊員―選考から出発まで
第 4 章　いざ、南極へ―設営の役割
第 5 章　昭和基地―施設と設備
第 6 章　基地での生活―衣食住と環境保全
第 7 章　観測隊の安全を守る
第 8 章　世界と協調する観測隊
第 9 章　南極観測の新時代

日本の南極観測は 1956 年 11 月、第一次観測隊を乗せた観測船「宗谷」の出港に始まる。「宗谷」の老朽化による 3 年の中断はあったが、再開の第 7 次隊以降は 50 年近くにわたり、観測を継続してきた。現在は、国立極地研究所が中心になって南極観測を運営している。なかでも、同研究所南極観測センターが、運営の中心である。本書は、その南極観測センターの編になるもので、いわば南極観測のプロたちが自分の仕事を解説した本とも言える。

章立てをみるとわかるように、本書では南極観測の成果については文中にすこし触れる程度である。南極観測がどのように計画され、準備され、実施されているか、なかでも特に「設営」とよぶ、南極で生活し観測調査するための基礎となる仕事を中心に解説している。内容は豊富で詳しいデータも含まれており、南極観測の歴史と現在を知る貴重な情報源である。

日本の南極観測は、私たちの大先輩・西堀榮三郎氏による「南極越冬記」以来、体験記、越冬記など、主に隊員による現場の報告として紹介されてきた。また近年では、斎藤清明会員をはじめとする観測隊同行記者の筆によっても、新聞記事や書物として紹介されている。しかし本書は、これまでになかった、南極観測を運営する側からの報告として企画された、ユニークな書である。現在、国立極地研究所の所長を務める白石和行氏が、南極観測センター長在任中に本書を構想されたとのことである。

本書の重要な目的のひとつが、「次代を担う青少年に将来の自分たちの活躍の場の一つとして考えてもよいくらいに、南極観測は魅力ある事業であり、南極の自然環境は人びとを魅了するすばらしい場であることを知ってもらうこと」と白石所長は述べている（はじめに）。また最後の第 9 章は、「南極観測の新時代」であり、この章を設けたところに、まさに新時代を開いていこうとする所長の熱意があらわれている。

南極観測のお手伝いを微力ながら務める筆者としては、本書が広く読まれることにより、南極観測が国民からさらによく理解され、また新たな力が次々と加わり南極観測の新時代が開かれていくことを願っている。

第29回雲南懇話会(2014年6月28日開催)に於ける講演概要等

前田栄三、安仁屋政武

第29回雲南懇話会は、2014年6月、東京市ヶ谷のJICA研究所国際会議場で開催され、約80名の参加を得て終了しました。以下、概要を紹介致します。

1.「私の山旅、天山＆アルタイなど」
―ハン･テングリ(7010 m)、ベルーハ峰(4506 m)他―

日本山岳会（海外委員会）、
パミール・中央アジア研究会
坂上 光恵

「1987年に初めて南テンシャンのタルガル山に登り、その後、テンシャンの山々に行く機会が増え、ハン・テングリには南面、北面両方から登る機会があった。また、アルタイ山脈の最高峰ベルーハは、ロシア、モンゴル、カザフスタンの国境にあり、日本人が余り入っていない山域である。」として、ハン･テングリ、ベルーハ峰登山の様子を紹介された。高校教師の傍ら、休暇を可能な限り海外登山に充てていると言い、その海外登山と山スキーの山歴は圧巻であった。最後に、ムスターグ・アタ、アコンカグア登山の様子が紹介され、アバチャ山を例に山スキーの楽しさに触れた。練達のロシア人ガイドとの長い交流が印象的であった。

2.「鉄器文化、石製鋳型を用いた鋳造技術」
―四川省俄亜郷における納西族の民俗調査より―

奈良県立橿原考古学研究所
宮原 晋一

四川省俄亜郷は納西族を主体とする行政区画である。交通事情の悪さが幸いして紅衛兵が侵入しておらず、文化大革命の影響が少なかったため、東巴文化が良好に残された地とされる。石製の鋳型を用いた鋳造技術が残っているとの情報に基づき、2005年と2006年に雲南省・麗江から道路事情の劣悪な現地に入り調査を行なった。確認できた伝統的鋳造技術と、見聞できた納西族の生活を写真で紹介された。

松井和幸編「シンポジウム　東アジアの古代鉄文化」（雄山閣、2010年）に詳しい。

3.「水・草・家畜からみた遊牧システム」
―モンゴル国首都近郊牧畜民の事例から―

千葉大学文学部准教授
児玉香菜子

モンゴル高原の自然環境の特徴は乾燥と寒冷にあるとして、ウランバートル・フフホト・東京を比較。社会環境として、面積・人口・民族など等、モンゴル国と中国内モンゴル自治区を比較、略述された。

ウランバートルから約150 kmの草原に居住する遊牧民一家の生活風景を、司馬遷「史記」（匈奴列伝）を引用しながら、水・草・家畜の利用など､略述された。パオの内部にテレビ(衛星放送、多チャンネル、太陽光利用)・冷凍庫、外にニッサン車があった。バイクが普及していると言う。家畜は羊・ヤギ・牛・馬・ラクダを言い、豚・鶏は家畜で無いという。今日的日常的な遊牧民の生活文化の一端が紹介された。

4.「ミャオ族の歴史と文化の動態」
―中国南部山地民の想像力の変容―

慶應義塾大学文学部教授、
日本山岳修験学会会長
鈴木 正崇

ミャオ族（Miao 苗族）の生活実態の変容と継続について概説された。

ミャオ族は中国南部の貴州省・雲南省・湖南省･広西壮族自治区などの山岳地帯の居住民で、同系統の人々はタイ・ベトナム・ラオスにも住む。山地の斜面を利用して焼畑耕作を営む移動性の高い人々と、河川盆地に定住し棚田を耕して稲作を営む人々から構成されていた。

「30年間に亘るミャオ族との付き合いを通して文化の変容、再創造、再構築を探求する。」として、「生活実態」「歴史の中の苗族」「近代における苗族の生成」「苗族の変動」「神話の再構築と現代」という各項目について、略述された。

具体的には、映画「グラン・トリノ」に描かれた米国に住むモンの生活の現状、中国古代から現代に至る歴史文献上に記載されている「苗」

と 1949 年以降の「苗」、1949 年以降の「創られた民族」と「自律的運動の開始」、漢族主体に提唱された「中華民族の多元一体」論と新たな苗族の「対抗言説」構築に、話は及んだ。「対抗言説」とは、「漢族の始祖とされる黄帝」に対抗させようとする言説である。古代の神話は、新たな装いをもって再構築されようとしている、として話を結んでいる。

自著『ミャオ族の歴史と文化の動態―中国南部山地民の想像力の変容―』（風響社、2012 年）は、第 11 回木村重信民族藝術学会賞に選ばれたとのことです。

5.「果物のふるさと、西域（伊犁）」
―リンゴの起源地での保全活動―

NPO 法人西域生態系保全フォーラム理事長、
静岡大学山岳会紫岳会、
静岡大学名誉教授（植物繁殖学）
大石　惇

天山北麓の伊犁州は、豊富な野生植物の生息地であり、特にリンゴの起源地とされている。しかし、新疆ウイグル自治区は地下資源の開発と工業化が進み、それに伴う人口の急増、食糧需要の増大から農業開発と過放牧が急激に進み、残っていた野生リンゴの群落も荒廃の一途を辿っていた。

日中共同で植物の野生種を保存し、その特性を調査し活用して行くため、新源県に 100 ha の「天山有用植物資源圃」を、1992 年から 8 年がかりで日中共同で建設してきた。今回は、1987 年から現在までの野生果樹の保全の様子を紹介された。最後に、様々な機関に保全の「提言」を行った結果、新源県チャオトウハイ郷に国際級の大植物園が建設されることになり夢が大きく膨らんだ、と締めくくられたのは、大変喜ばしいことであった。

リンゴはアジア西部からヨーロッパ南東部の原産とされる。カザフ語（チュルク語派）でアルマはリンゴを指し、アルマトイとは「リンゴの親父」を意味すると言います。

冒頭、静岡大山岳部長であった故酒戸弥二郎会員のことを話され、海外登山に当って、酒戸先生のご縁で岩坪五郎さん、平井一正さんを始め AACK から多くのご教示をいただいた旨、謝意と共に語られた。

会員動向

編集後記

今回から体裁を横書きとしました。これまで何人かの方に相談したところ皆さん賛成されましたし、前号編集後記でこのことについてお尋ねしましたが特にご意見はありませんでした。そこで、思い切って横書きに変更した次第です。初めてのことで、私もなにか見慣れない感じはしますが、文中で使われることの多い数字や英字は読みやすくなるなど、よい点もあるので、皆さんもだんだん慣れてくださると思っています。

平井一正さんには、「人物抄　佐島敬愛」という興味深い文章をいただきました。佐島敬愛さんは、私にとっては昔から AACK の名簿のなかでお名前は見ていたものの、今西錦司さんらと同年代らしいがウィスコンシン大卒という珍しい経歴以外はわからず、どんな方なのかと思っていたものでしたが、はじめてその一端をうかがうことができました。

70 号では、会員以外からお二人の寄稿をいただきました。

まず、角川（すみかわ）咲江さんは、AACK に縁の深い西堀榮三郎記念探検の殿堂の副主幹であり、運営の中心としてご活躍です。昨年は「西堀榮三郎と AACK の山」という企画展示もありましたので、殿堂でお会いになった会員も多いと思います。今年 5 月の総会のときに講演していただきましたので、その折りに寄稿をお願いしたものです。殿堂の最近の動きの一端をご紹介いただきました。

もう一人は坂田洋子さんです。本文にふれられているように、私が武庫川女子大学の教員だったころに、山岳スキー部の元気な部員だった方です。昨年、ご自身も出場･完走された「ウルトラトレイル・マウントフジ」という富士山一周トレイルランのテレビ番組について知らせてくださったので、その案内を笹ヶ峰会メーリングリストで紹介したところ、番組を見た会員から、ぜひトレイルランのことをニュースレターに書いてもらってほしいという希望がよせられましたので、お願いした次第です。

榊原さんには、斎藤清明さんの「今西錦司伝」の書評をいただきました。この本を見て、これはぜひ取り上げなければならないと思ったのですが、どなたにお願いするか、適任と思える方も多いので迷いました。結局、私としては頼みやすい榊原さんにお願いしました。著者と近い立場でのご苦労もあったかもしれませんが、日数も少ない中で仕上げていただきました。

雲南懇話会の報告を前田さん・安仁屋さんからいただきました。今年が 10 周年になるそうで、8 月 16 日の第 30 回雲南懇話会は、『「アフリカ地域特集」の記念講演会』として、開催されるそうです。70 号の発行はそのご案内には間に合いませんでしたが、次号にはまた盛会の様子をご報告いただけるものと期待しています。

図書紹介の拙文は、南極では多くの方にお世話になりながら貴重な経験をし、また南極観測のお手伝いを微力ながら務めている立場として、この本が広く読まれることを期待して書きました。近くに南極に興味を持つ方がおられたら、ぜひお勧めください。

70 号に原稿をちょうだいした皆様、ありがとうございました。編集中は猛暑と台風でしたが、次号は秋、笹ヶ峰の紅葉の頃が締め切り、よろしくお願いいたします。

横山宏太郎

第 71 号（2014 年 11 月発行予定）原稿募集のおしらせ
―「1964 年京都大学山岳部ネパールヒマラヤ遠征隊」について―

今年、2014 年は、上記の京都大学山岳部隊がアンナプルナ南峰（ガネッシュ）に初登頂した 1964 年から 50 年目にあたります。この隊は名称のとおり京都大学山岳部の隊であり、AACK との直接の関係はありませんが、隊長・副隊長は AACK 会員、当時の現役学生隊員も卒業後は AACK に入会、それぞれ大いに活躍されたことはご存知のとおりです。

そこで、AACK　Newsletter では、この登山隊に関連することとして、当時の思い出や 50 年の回想、今後に伝え残したいこと、報告書には書かれなかったことなどの原稿をいただき、第 71 号に掲載したいと考えております。

隊員の皆様にはそれぞれ執筆のお願いをする予定ですが、**隊員以外の方からの寄稿も大いに歓迎いたします。**どうぞふるって原稿をお寄せください。

原稿の締め切りは 10 月 16 日、送り先は編集人です。よろしくお願いいたします。

（編集人　横山宏太郎）

発行日　2014 年 8 月 31 日
発行者　京都大学学士山岳会　会長　松林公蔵
発行所　〒 606-8501
京都市左京区吉田本町（総合研究 2 号館 4 階）
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究
研究科　竹田晋也　気付
編集人　横山宏太郎
製　作　京都市北区小山西花池町 1-8
㈱土倉事務所